り。たとへば、明德至善の理は、天よりそなはりてあれども、教によつて修せざれば、明德至善に復せざる故に、師の教に順ふ。是れ寶なり。衣食住は定りたる道理にして、無くて叶はざるものなるを、是れをよろしき如く致す。是れ三寶にあらずや。

九五　形、作法、勢

全書に、備の善惡、あつき、うすき、しくらむ速なる三段の事、是れは形と、作法と、勢、となり。形はあつき、うすきなり。作法は、善惡なり。勢はしくらむ速なるなり。

九六　三月二十六日、淺野氏に示す

今謂ふ所の心には勇怯なく、只善惡進退のみと。凡そ心は唯虛靈のみにして、勇怯もなければ、善惡もなく、進退も無し。唯虛靈にして名づくべき所なきのみなり。心に勇怯の無きと斗見るは惡きなり。此處にある所の花の紅白を見て、紅と知り白と知る。是れ皆氣のわざにして、內にとゞまる處なし。たとへば目は物を見る役にして、物を見るに、紅白と見る是れ心なりといはゞ、知覺を以て心とするなり。心に元知覺は無し。只氣によつて知覺するのみなり。されば目をふさげば、心ありても、紅白は知られざるなり。只舌の內斗にて味を知る。味を知るも是れ知覺なり。心に味を知るものは無し。唯その通じて、かくるゝこと無きまでなり。さるを以て、目も、口も、鼻も、手足も、皆是れ唯知覺のわざは、その所の形に、氣の相めぐりて知る所なり。證據には人の身の不仁なるは、いたき、かゆきを覺えず。然るとて心の無きにはあらねども、氣の運らざる處故なり。心に知覺するものならば、死してこそ知るまじきに、生きながら體の通ぜざる所あるは、是れ氣のわざにあらずや。

然るときは、知覺心にあらざれば、つゝじの花の紅白を見て、紅白を知る、是れ心にあらざるや。曰く知覺を以て心と爲すは、異端佛者の說なり。佛者も知覺するもの是れ佛體なり。これさとれと云ふことなれば、心性の沙汰儒と一體なるべきや。然らず。儒は心は虛靈にして、くらからざるまでといへり。心は天理の一體にして、知覺は皆氣によつてなす處なるを、氣をとらへて心なりと云ふ故に、欲するもの願ふもの、皆心たりと云ふて、

告子が論も、荀子の性惡の說も、仍て出る所なり。是れ皆氣をとめて心とするなり。

然らば心は何事もなきものにや。曰く心、何事のあるべきことなし。知覺運動する所以のものを心と云ふ。その心は味をつけて云ふべき所なし。只虛靈にして、よく物をうつすが故に、至らざる無きなり。

然らば心に仁義もあらざるや。仁義も氣形によつてなれる仁義にあらずや。曰く仁義も氣形によつて生ず。然れども發して物に應ずる處の發動は、仁義より始まる故に、仁義を以て本とするなり。

然らば仁義は、外にて形にありや。然らず。形を離れ氣をのけて、心をとくべきもなく、心を離れて氣形をとくべきもなし。更に三のもの三にあらず。又一にあらざるなり。然れども心は道源にして、言を以て云ふべきにあらず。論じて益なし。只虛靈のみなれば、たとへば水精の一圓石を水中にをくが如くなり。

九七　明經は究理にあらず

本朝紀傳の博士斗さかんにして、明經の士これ無きは、紀傳は人の知る處なり。明經は究理にあらざればいたらざるなり。究理は、人のかなひ難く、聞き、見る、ものゝなきことなる故なり。唐の科目も、進士明經ばかり殘りて、進士は聲、韻、をのみ覺ゆ。明經は博學のみにして、義理を知らざると云ふ是れなり。

九八　何事か學問にあらざる

世間萬事に交はり、雜客に逢ひ、閑談を爲すによつて、今日の工夫もなりにくゝ、學問の修行進みにくきなり。在所にありては、つとめも進みよしと云ふ人あり。予云く、心を閑にして默識するの工夫と、人を絕ち境を去りて、然る可きか。されども夫子の默識と云ふは、境をきらひて默識をもとむるにはあらざるなり。學文は、書を讀み心を澄ますの謂にあらざるなり。賓客の應接、世事の事業、何事か學問にあらざるや。されば在所國にありても、その用所は止むことのあるまじきなれば、いとまのあると云ふ說は、あやまりにや。若し在國の時閑暇なりと云はゞ、是れ世事を厭ふの故にあるべきなれば、唯閑居を好

むこと、學者甘心の工夫にして、切に聖學の用にあらざるなり。

九九　事理一體は聖學の淵源

松平新太郎某の仕置よく、國治まりたるなりと云へり。予云く備前の太守學の志は深きこと必然たり。然れば國政も愛深く、民これになづくべきなれども、國を治むるの法を知らざるときは、志までにて、實に修して知るの法なければ、聖學の治國平天下の要法にあらざるなり。或る人云く、民も思ひつき、其の上所を通りて見るに、民の作法、道、橋、の修造も、殘る所なきなれば、作法もよきにや。予云く、大體みえ來れる所は、人の定りて知る處なれば、さやうにはあるまじ。唯何事によらず、一ついたす事までも、事理の一致にあらざれば、聖人の學と云ひがたし。事理一體は聖學の淵源なり。

一〇〇　人ほど盛りの久しきものはあらず

人ほど盛りの久しきものはあらざるなり。花は七日の盛りを見んために、三百六十日のやしなひをなす。何ものにても、深く養ふて、少しの盛りを見ることなり。

海道日記

本書は承應二年八月、素行先生が江戸を發し、東海道を經て、つひに播州赤穗に至りたる時、道中に吟咏したるもので、原書は東海道道中日記と題し、平戸の山高高三氏所藏にかゝる。今こゝに摘錄したる三十餘首の詩は、道中の實見、實感にして、又先生の文才詩想にすぐれたりしことをも敬服せしめられるものである。

海道日記抄

大佛　安置五智如來

驛路遙催八月天。如來堂上擲金錢。杳々漁舟溟烟裏。滿目江山皆自然。

鈴　森

林中有石響冷然。遊泊遠人題一聯。吟蟬暗似送旅客。唧々秋聲常攪眠。

品　川

萬頃白波遠別秋。每逢佳境思悠々。輕舟短棹唱歌處。遙顧江東題水流。

藤　澤

寺堂高築挑燃燈。一望凄然多廟陵。葉落孤村漁火見。雁飛幽洞白雲層。鎌倉古郭今無跡。江島神仙感興競。獨立撫松秋色晩。古碑字滅對歸僧。

題　虎　石

武夫猶屈十郎情。可畏可愼一顧傾。虎婦操心盟得否。終成此石見斯貞

題小田原城

孤城對海破烟霧。前海後山兀々高。北條五傳英雄事。廢興至所在秋毫。

題三島

初拜社頭三島神。金宮紫閣薦溪蘋。雲收朗月浮山殿。松響寒蟬薄暮新。

題富士山

遠望暮煙抹玉眉。近因白雪洗華肌。乾坤別置銀世界。何識扶桑有四時。

素聞遙越此峯巒。蟠跨三州日本冠。若雪時得到山上。扶桑六十一團丸。

仙客釋流多少歟。閑吟乍覺日西春。白梅淡月四時景。一日千客一士峰。

題薩埵山

薩埵高聳臨海波。旅人幾度昔經過。萬夫昔日横旗地。枯草凜々似動戈。

題田胡浦

山海共清萬壑松。士峯浸影水中龍。扁舟幽棹對漁火。漠々烟光遠寺鐘。

清見寺

深洞長松古寺梅。江山勝迹太奇哉。古今代謝人間事。天竺天生赫々堆。

蘿薜幽居處。石泉盈掬清。僕夫對鞍睡。征馬得鞭驚。清見寺前景。田胡浦地晴。僧房寒水

靜。萬籟寂無聲。

題久乃宮

儼然一靈山。人跡奈躋攀。地遠世情薄。溪深學侶閑。堂々金殿閣。杳々晝甍寰。松見千年

色。竹彰君子顏。神明今日德。昔往幾難艱。天下全天下。萬民無獨鰥。

題駿府

東照靈神仰是香。駿陽卜地翠扶桑。太平五十年來事。如在洋々祝久長。

內屋

悠々奇嶺遠人烟。雨路崔嵬馬不前。楓葉經霜紅色美。遺篇殘愛幾年々。

題大井川

遠到島田雨殆晴。兩崖更隔不分明。蓑裳旅客滄溟裏。金谷泊亭獻熟羹。

題小夜中山

有山號小夜中山。歌老西行命也嘆。客路年光更無住。垂揚終古暮鴉讙。

日坂

婆見行人呼蕨餽。夫催驛馬待前來。伯夷遺愛在傍路。秋館雲凝萬古哀。

池田（重衡關東ニ下向ノトキ此所ニ泊テハニフノコヤノ歌アリ）

思出昔年鞍馬過。天龍水浩有烟波。遊君長者何處是。古渡無人愁草多。

題荒井海

渺々潮波獨愁秋。相看是別往來舟。中流欲話古園事。一葉縱之少不留。

題矢作川

蛟龍臥浪此長橋。橫槊武夫多沒消。矢作川流依然去。委泥遊魂獨迢々。

題八橋

八橋風景得佳名。蔓草寒炯鎖水汀。人世去來眼前事。成田成澤幾霜星。

題熱田宮

神日本武尊。洋々乎似存。古宮依舊靜。華閣映波蜿。聞說蓬萊事。尋問道士言。謫客琵琶曲。對月語殘痕。（師長琵琶ノ事、出盛衰記第十二卷）

題桑名

元太守源定綱、有顧盻于予。今思時昔時、卒題詩。

海君向洋七里程。遠帆風送更吹晴。邯鄲夢裏黃粱熟。在耳餘音太守情。

題鈴鹿

到此阪、思漢王陽爲益州刺史、到九折坂、嘆曰、奈何、奉先人遺體、乘此險。因而回車。

棧道連空鈴鹿關。回頭涉險思王陽。田村東討此山賊。勢路新開安泊商。

草　津

左右廣原場、告

草津見菊

略近洛邊地氣清。芳塘長繼道平々。驛夫挿菊寄愁客。初駭今朝秋已盈。

勢　田

兩軍必蹙世田塘。慘耳傷心幾斷腸。帝德恩波流無限。却今成翰墨之場。

題　石　山　寺

漫々波浪咽危石。片々孤舟棹碧天。古木千尋人跡絕。柴扉半掩學僧眠。多情練漉若干冊。紫女筆端今古鮮。聞說中秋新月節。遠臨湖水寫全篇。

題　大　津

湖水茫々一色天。東西南北客旅連。商亭縱目惱吟意。阡陌事繁忘日遷。

遊　三　井　寺

獨出大津吟海濱。一山高秀石泉新。僧房吸盡東江水。三井法流嫋々醇。

題　艮　巖

帝都護鎭比叡巒。天臺法水漲波瀾。山王七社洗凡慮。根本中堂凝世肝。志賀孤松秋更慘。堅田漁泊火猶殘。蜘蛛鎖硯懶疎事。墨汁偶然洒筆端。興去悲來盈虛變。天高地濶古今看。江湖明月嶺間響。不盡乾坤不變觀。

題　相　坂

陳迹猶殘相阪名。蟬丸遺響只松聲。清泉浸影此關鎖。荒癈幾年交辱榮。

京　師

重陽入京。

節到重陽入洛京。路邊黃菊故園情。曾聞帝都名利地。塵上加塵心不平。

昭和十二年六月廿五日印刷
昭和十二年六月三十日發行

日本教育家文庫　第十九卷

著者　山鹿素行

發行者　東京市麴町區飯田町一ノ七　中山久四郎

印刷所　東京市小石川區久堅町一〇八　石田磊三

共同印刷株式會社

發行所　東京市麴町區飯田町一ノ七　振替東京三九三七七番　電話九段三九〇九番

北海出版社

札幌市南二條西十二丁目　振替小樽一二七〇七番　電話三五〇六番

HOKKAI SHUPPANSHA
中山
日本教育家文庫

255.1
144